

V・E・フランクル「ロゴセラピーの基本概念」の変遷

——欧州から米国への読者層の拡大を受けて——

竹之内 禎

1. はじめに

ロゴセラピー (Logotherapie) とは、ナチス強制収容所の体験記である『夜と霧』¹⁾等で知られるオーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) が創始した、「生きる意味」(Sinn des Lebens) の思想に基づく心理療法である。フロイトの精神分析学と、アドラーの個人心理学と並んで、精神分析学ウィーン第三学派とも呼ばれる。

本論文では、フランクルがロゴセラピーの概説として『夜と霧』の英語版に付した「ロゴセラピーの基本概念」(Basic Concepts of Logotherapy) の原稿の異なるバージョンを比較して、その内容の変遷が、欧州から米国への想定読者層の拡大に伴う配慮でもあることを明らかにする。

まず、当該論考の主題である「ロゴセラピー」の概要をまとめ、次に「ロゴセラピーの基本概念」の経緯と構成を確認した後、改訂されたバージョンと比較して、記述の異なる部分を検討することとする。

2. ロゴセラピーの概要

2.1 ロゴセラピーの人間観

フランクルは、人間を「身体」、「心理」、「精神」の三つの次元からなる存在にとらえている。「身体」と「心理」は生物としての自己保存的な欲求の機能を担う（これらをまとめて「心身態」(Psychophysikum) と呼ぶ) のに対して、「精神」は、自己距離化 (客観視) と自己超越 (自己中心的欲求の克服) の能力を持つ。いわゆる「心」の機能を、自己保存的な「心理」と自己超越的な「精神」とに分けていることがフランクルの特徴であり、「生きる意味」を見出す力は「精神次元」にあるとする。

「心身態」は、人間の生物としての存在要件であり、他の動物にも共通のものであるが、「精神次元」は人間において特徴的な機能であるとされる。

¹⁾ ヴィクトール・E・フランクル著、池田香代子訳『夜と霧 新版』みすず書房, 2002 = Viktor E. Frankl, *...trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, 8. Auflage, Kösel, 2002 = Viktor E. Frankl, *Man's search for meaning*, Rider, 2008

表1 ログセラピーの次元的存在論²⁾

人間を構成する次元	機能
精神 (spirit / Geist)	自己距離化・自己超越
心理 (mind / Seele)	情緒・思考
身体 (body / Leib)	生理的機能

2.2 生きる意味の類型=三つの価値概念

フランクルは、普遍的な「人間の生きる意味」のようなものを想定していない。「生きる意味」とは、その時々固有の状況に対して、そこに居合わせた各人が具体的な行為をもって応答する中に見出されるものであるとされる。

ただし、「生きる意味」を客観的に論じるために、これを大きく三つの「価値」に類型化している。

第一は「創造価値」(creative values / Schöpferische Werte)であり、世界に対して何かを生み出すときに内面に実現される価値である。

第二は「体験価値」(experiential values / Erlebnis- werte)であり、世界から何かを受け取るときに内面に実現される価値である。

第三は「態度価値」(attitudinal values / Einstellungs- werte)であり、変更不可能な困難な制約に対して、精神の反抗力(Trotzmacht des Geistes)を発揮して、意味ある態度を取るときに実現される価値である。

三つの価値は、「心身態」(自己中心的欲求機能)の次元にではなく、状況から距離を置いて自己をも客観視し(自己距離化)、自己中心的欲求を克服する(自己超越)意志の力、「精神」の次元において実現されることに留意が必要である。つまり、ログセラピーにおける「生きる意味」は、単に個体としての身体的・心理的欲求を満たすところではなく、「自分以外の何か」を志向するとき、「他者」に向かうときに見出される意味を指す概念である(図1)。

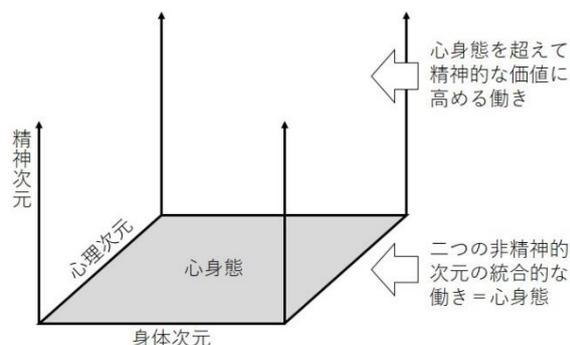


図1 心身態と精神³⁾

生きる意味の発見・実現を助けるログセラピスト(支援者)は、クライアント(相談者)の身体的、心理的な制約条件(心身態の状況)に配慮しつつも、主として精神次元にはたらしかけ、「意味への意志」(will to meaning / Wille zum Sinn)を喚起し、それを満たすこと

²⁾ 勝田茅生著『フランクルの生涯とログセラピー』システムパブリカ, 2008, pp.79-80等を参考に作成。

³⁾ Elisabeth Lukas, „Lehrbuch der Logotherapie: Menschenbild und Methoden“, 4., aktualisierte und durchgesehene Auflage, Profil, 2014, S.19.の図をもとに作成。

を助けようとするのである。

2.3 自己実現から意味実現へ

フランクフルトによれば、人は人生（生きること）に意味を「求める」べきではなく、人生からの問いに具体的な行動で「答える」べき存在である。

人は、状況に対して常に態度を取る自由がある。状況の意味とは、精神次元に属する意味器官である「良心」（Gewissen）が把握するものであるとされる。

フランクフルトは、内面的な成功と外面的な成功とを分けて考える。

外面的な成功とは、心身態（身体次元および心理次元）の欲求に基づく自己実現欲求の充足であり、「やりたいこと」の実現である。内面的な成功とは、精神次元の「意味への意志」に基づく三つの価値、すなわち「意味あること」の実現である。

両者はたまたま同時に実現することはあっても、本質的には異なる次元のものである。フランクフルトが「生きる意味」の類型として示した創造価値、体験価値、態度価値は、図 2 における縦軸、つまり精神次元（内面的な成功、意味の実現）に関係している。

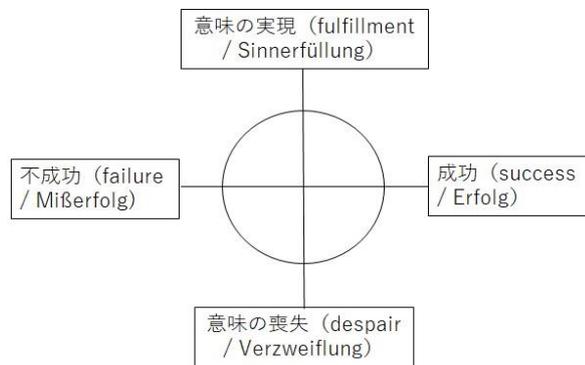


図 2 成功－失敗の軸と意味の実現－喪失の軸⁴⁾

3. 「ロゴセラピーの基本概念」の概要

3.1 「ロゴセラピーの基本概念」の成立と改訂

以上をふまえ、本論文の主な検討対象となる論考「ロゴセラピーの基本概念」に考察を進めたい。

「ロゴセラピーの基本概念」（Basic Concepts of Logotherapy）は、フランクフルトの『夜と霧』英語版が爆発的に読まれるようになった米国の読者のために『夜と霧』英語版の付録としてロゴセラピーの概説を述べた解説論考である。

『夜と霧』原著は、1946年にオーストリアで「一心理学者、強制収容所を体験する」（*Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*）のタイトルで刊行されたが、敗戦後まもないドイツ語圏においては広く読まれるに至らなかった。1956年に日本語版（『夜と霧』）が刊行され日本で多くの読者を獲得した後、1959年米国で英語版が刊行され爆発的な広がりを見せた。その際、米国の読者から「ロゴセラピーについての概説書がほしい」という要望が

⁴⁾ 勝田茅生著『精神の反抗力と運命／喪のロゴセラピー』システムパブリカ、2008、p.25の図をもとに作成。

多く寄せられ、それに応えるべく執筆されたのが論考「ロゴセラピーの基本概念」(Basic Concepts of Logotherapy) である。

この論考は 1962 年に『夜と霧』英語版の改訂版の付録として収録された。英語版書籍のタイトルも、*From Death-Camp to Existentialism* (死の収容所から実存主義へ) から *Man's Search for Meaning An Introduction to Logotherapy* (人間の意味探求：ロゴセラピー序説) へと改められ、本編が『夜と霧』、付録に「ロゴセラピーの基本概念」という構成となった。

その後、1992 年の改訂版で、付録の解説論考にも修正が行われ、その際、論考のタイトルが「ロゴセラピー入門」(Logotherapy in a nutshell) に改められている。

本論文では、1962 年版の英語版改訂版に付された解説論考「ロゴセラピーの基本概念」と、1992 年版に改訂された解説論考「ロゴセラピー入門」の記述とを比較する。

前者は 1962 年版にほぼ相当すると考えられる 1964 年刊行の版を邦訳した『意味による癒し—ロゴセラピー入門』(春秋社, 2004) 第 1 章「意味による癒し—ロゴセラピーの基本概念」として収録されており、後者の 1992 年版は、フランクルの娘婿であるフランツ・ヴェセリによるドイツ語訳 *Grundkonzepte der Logotherapie* (2015) の邦訳が『ロゴセラピーのエッセンス—18 の基本概念』(新教出版社, 2016) の本編「ロゴセラピーの基本概念」として収録されている。

表 2 「ロゴセラピーの基本概念」の略年譜

1946 年	原著(独語版『一心理学者、強制収容所を体験する』)刊行。
1956 年	日本語版(『夜と霧』)刊行。
1959 年	英語版(死の収容所から実存主義へ)刊行。
1962 年	英語版改訂版(『人間の意味探求』)刊行。巻末に Basic Concepts of Logotherapy(ロゴセラピーの基本概念)が付される。
1992 年	英語版の付録が Logotherapy in a nutshell(ロゴセラピー入門)に改訂される。
2004 年	邦訳『意味による癒し』刊行。第 1 章に、Basic Concepts of Logotherapy 邦訳を収録。
2016 年	邦訳『ロゴセラピーのエッセンス』刊行、本編に Logotherapy in a nutshell の独語版 <i>Grundkonzepte der Logotherapie</i> (2015) の邦訳を収録。

3.2 「ロゴセラピーの基本概念」の構成

「ロゴセラピーの基本概念」の構成は以下の通りである。原著には番号が付されていないが、便宜上『ロゴセラピーのエッセンス』に従って遠し番号を与えた。() 内が邦訳で、異なる邦訳がある場合は、「/」の前が1964年版（以下「旧版」と表記）の訳、後が1992年版（以下「改訂版」と表記）の訳である。

序文（タイトルなし）

- 1 The Will to Meaning（意味への意志）
- 2 Existential Frustration（実存的欲求不満／実存的フラストレーション）
- 3 Noögenic Neurosis（精神因性神経症）
- 4 Noö-Dynamics（精神一力動学／精神の力学）
- 5 The Existential Vacuum（実存的空虚／実存的空虚感）
- 6 The Meaning of Life（人生の意味）
- 7 The Essence of Existence（実存の本質）
- 8 The Meaning of Love（愛の意味）
- 9 The Meaning of Suffering（苦悩の意味）
- 10 Meta-Clinical Problem（超臨床的問題／メタ臨床的な問題）
- 11 A Logodrama（あるロゴドラマ）
- 12 The Super Meaning（超意味）
- 13 Life's Transitoriness（人生の移ろいやすさ／人生のはかなさ）
- 14 Logotherapy as a Technique（ロゴセラピーの技法／技法としてのロゴセラピー）
- 15 The Collective Neurosis（集団的神経症）
- 16 Critique of Pan-Determinism（汎決定論への批判／汎決定論的批判）
- 17 The Psychiatric Credo（精神医学の信条／精神科医としての信条）
- 18 Psychiatry Rehumanized（精神医学における人間性の回復／精神医学における人間性の復活）

このうち、旧版と改訂版とで異動が見られるのは「序文」の1か所と、「1 意味への意志」の3箇所である。それぞれについて以下で検討する。

4. 「ロゴセラピーの基本概念」の変遷

4.1 「責務〈タスク〉」という語の削除

序文について見ると、旧版にあった以下の下線の箇所が改訂版では削除されている（引用文中の〈 〉は原文のルビ）。

「……ロゴセラピーでは患者は実際に彼の人生の意味に直面させられ、その意味に向かって新たに方向づけられるのです。それゆえ、ロゴセラピーの意味するものについておこなった私の即興的な定義は、真に神経症の人が人生の責務〈タスク〉をしっかりと自覚することから逃げようとする点で真実を含んでいます。そしてこの責務を彼に気づかせること、それについてしっかりした意識を彼に喚起することが、彼の神経症を自らの力で克服することに大きく貢献するのです。」(『意味による癒し』 pp.4-5)

「……実際にロゴセラピーによって患者は自分の人生の意味と向き合い、新しい方向を見いだしています。患者にこの意味を気づかせることで、神経症を克服する力が強化されます。」(『ロゴセラピーのエッセンス』 p.16)

旧版で、「ロゴセラピーの意味するものについておこなった私の即興的な定義」とは、ロゴセラピーを一言で説明してくれ、という要求に対して、即興でフロイトの精神分析が「ソファに横になり、時には語りたくない過去のつらい体験を医師に語らなくてはならないことがある」のに対して、 فرانクルのロゴセラピーは「体を起こしたまま、時には聴きたくない耳の痛いアドバイスを聞かなくてはならないことがある」と説明したことを意味している。

現在の症状を過去のせいにすることで「神経症の人が人生の責務をしっかりと自覚することから逃げようとする」ことにもなると指摘しつつ、ロゴセラピストは、患者のまなざしを、未来に向けて進むべき意味に向けさせることを意図している、という箇所である。

この箇所で注目すべきは、「責務〈タスク〉」という語が削除されていることである。フランクルは、熱心なユダヤ教徒であり、ロゴセラピーの理論にも一神教的な信仰、信念の片鱗が見て取れる。しかし、特定の宗教に依拠することによってロゴセラピーが色づけされ、普及を妨げられるリスクが生じることも理解しており、それを避ける必要性も感じていた。

フランクルの母国オーストリアはカトリック国であり、ユダヤ教もカトリックも、神が一人ひとりの人間に固有の責務〈タスク〉を与えている、という考え方は(特に執筆時の1962年頃は)受け入れられやすかったと思われる。それに対して、米国では、神から決まった意味を与えられたという説明よりも、おそらくは自分自身が人生の意味を見出していこうとする開拓者精神が強く、そのことを次第に理解したフランクルは、解説論考の改訂版において、「神から与えられる意味」とも受け取れる「責務〈タスク〉」という表現を削除して、「人生の意味」(meaning of life)の部分のみを残したのではないかと考えられる。

4.2 社会調査事例の選定と解釈

「1 意味への意志」においては、3か所の異同が確認できる。1つめは以下の箇所である。

「フランスで数年前に世論調査がおこなわれました。その結果、人間はそのために生きる「何か」〔生きる意味〕を必要とするということを認めた人の割合は八九%にのぼりました。……私もこの調査をウィーンにある私のクリニックで患者と職員の双方におこなってみました。その結果は、フランスで何前任という人に調査したものをほとんど同じであり、違いはわずか二%にすぎませんでした。換言すれば、意味への意志は、多くの人々においては事実であって、決して信仰ではないということなのです。」（『意味による癒し』p.6）

「わたしは数年前にフランスでアンケートを実施したのですが、回答者の八九パーセントは、人間はそのために生きる価値がある「何か」を必要としているという意見でした。……この調査をウィーンの病院のわたしの科でも実施したところ、フランスで数千人を対象にして行ったアンケートと実質的に同じ結果を得ました。両者の差は二パーセントにすぎませんでした。

ジョンズ・ホプキンス大学の社会学者たちは、四十八大学の七九四八人の学生に対して、別の統計調査を実施しました。アメリカ国立衛生研究所が後援した二年間におよぶ研究の一環として、その暫定報告書が後悔されています。この報告書では、あなたにとって「非常に大切」なものは何ですかという問いに対し、十六パーセントの学生が「たくさんのお金を稼ぐこと」だと答えましたが、七十八パーセントの学生は、自分たちの最大の目標は「自分の人生における意味と課題を見つけることだと答えています。」（『ロゴセラピーのエッセンス』pp.17-18）

旧版の「意味への意志は、多くの人々においては事実であって、決して信仰ではない」という部分が、改訂版では削除されている。

フランクは、「どんな時にも人生（生きること）には意味がある」という信念と、人間には「意味への意志」が備わっているという信念を持っており、これについての補強として示したものと思われる。しかし、この箇所表現は2つの問題を含んでいた。

まず、たった2つの（そのうち1つは少人数の）調査結果のみから、「人が意味への意志を持つことは科学的な事実なのだ」と結論づけることが、果たして科学的な言説なのか疑わしい、という問題である。

次に、「多くの人々」にとっては、意味への意志を持つことが主観的な「事実」であっても、「他の人々」にとっては、逆に「意味への意志を持たない」ことが主観的な「事実」だとも読み取れてしまう、という問題である。意味への意志はもともと信念の領域に属していると考えても不都合はなく、あえてここで「意味への意志」の科学性を強調する必要はないし、論証自体も合理的でないと判断したのかもしれない。

加えて、改訂版で「ジョンズ・ホプキンス大学の社会学者たちは」以下が加筆されていることにも注目したい。より科学的な記述に改めつつ、米国の大学の調査結果を示すことで、

米国の読者に親近感や説得力を与えることを意図したように思われる。

なお、改訂版の邦訳では「わたしは数年前にフランスでアンケートを実施した」とあるが、原文は「A public-opinion poll was conducted a few years ago.」で、独語訳も「In einer Umfrage, die vor einigen Jahren in Frankreich durchgeführt wurde」なので、フランクフルがフランスでの数千人規模の社会調査を実施したとは読み取れず、誤訳の可能性がある。

4.3 侮蔑的表現の回避

「1 意味への意志」における異同の2つめは、以下の箇所である。

「もちろん、ある個人が価値に関心を抱くことが、実際にはその人の隠れた内的葛藤のカモフラージュにすぎない場合もあるかもしれません。しかし、たとえそうだとしましても、そのような人は法則そのものよりもむしろ例外であることを示しているのです。こうした事例の場合には、心理力動的解釈が、その深層にある無意識の力動を露わにする試みとして正当化されてよいでしょう。そのような場合にはわれわれは実際には偽装〈プシュード〉価値として扱わねばならず(その好例は偏狭な人〔ビゴット〕のケースです)、またそのようなものとしてその正体が暴露されねばなりません。けれども、この暴露、あるいは仮面をはぐことは、人間の内なる真実にして真正なるものに直面した場合にはただちに中止されねばなりません。例えば、できるだけ意味ある人生にしたいという人間の欲求がそれです。もしも暴露することがそこで中止されないとすれば、それは、暴露しようとしている本人自身の、他人の精神的願望の価値を下げようという意志の暴露にすぎないのです。」(『意味による癒し』 p.7)

「価値の問題に取り組んでいると見せかけて、実際には、ひそかな内的葛藤をカムフラージュしている場合もあるかもしれません。しかしたとえそうであったとしても、それは原則の例外にすぎないのであり、原則そのものではありません。こうしたケースでは、わたしたちは偽りの価値のみを問題にして、その仮面を剥がす必要があります。しかし人間内部にある本物の純粋な価値に出会ったとき、たとえば意味に満ちた人生に対する憧れが姿をあらわしたときには、仮面剥がしをそこでやめるべきです。もしもそこでやめないと、その「暴露する心理学者」は現実には自分自身の「隠れた動機」を暴露することになるでしょう。つまり彼の無意識は、人間の中にある純粋なもの、純粋に人間的なものを卑しめ、軽視しようとしているのです。」(『ロゴセラピーのエッセンス』 pp.17-19)

改訂版では、「偏狭な人〈ビゴット〉」という語を挙げた部分が削除されている。

旧版の訳注にもあるように、「bigot とは、宗教・民族観・政治などで、自分と異なった信条・信念・意見などをまったく受け入れない人」(『意味による癒し』 p.64)であり、ここでは深層心理の歪みから偽りの態度を取る人の例として挙げられている。

しかし、フランスの画家・銅版画家ジョルジュ・ビゴー (Georges Bigot, 1860-1927) や、フランスの指揮者ユージュヌ・ビゴー (Eugène Bigot, 1888-1965) などフランス系の人名にも「Bigot」が使われるので、こと人権意識の高まりを見せる米国の読者に対して該当箇所が侮蔑的表現とも受け取られかねず、必要不可欠な事例でもない判断して、削除されたのではないかと考えられる。

4.4 3つの段落の削除の論点

4.4.1 削除された箇所

「1 意味への意志」における異同の3つめは、4.3で挙げた旧版の引用箇所が続く3つの連続する段落であり、これが改訂版では削除されている。やや長くなるが以下に全文を引用する。

「私たちは価値を単なる人間自身の自己表現という観点から取り扱おうとする傾向に気をつけなければなりません。なぜなら、ロゴスとか「意味」というものは、単に実存それ自身から生じるものではなく、むしろ実存に向かい合ってくる何ものかだからです。もしも人間によって充足されることを待っている意味というものが本当に自己の単なる表現にすぎないとすれば、あるいはまた彼の切望している考えの投射にすぎないとすれば、そのとき意味はただちにそれ自身の要請的性質や換氣的性質を失ってしまうことになるでしょう。そうすると意味はもはや人間を呼び起こしたり奮い立たせたりすることができなくなります。このことは、いわゆる本能的衝動の昇華に対して当てはまるだけでなく、C・G・ユングが「集会的無意識」の「元型」と呼んだものに対しても当てはまります。と言いますのは、後者もまた自己表現、つまり人類全体の自己表現だと思われるからです。このことはさらに、人間の理想の中に人間自身の作りもの〈インヴェンション〉しか見ない若干の実存主義的思想家の主張にも当てはまります。ジャン・ポール・サルトルによれば、人間は自分自身を作り出す〈インヴェント〉のだ、人間は自分の「本質」をデザインするのだ、とされます。つまり、人間が本質的にあるもののうちには、[その本質が人間によってデザインされたものであるから]人間があるべきもの、人間がなるべきものも含まれているのだ、というわけです。けれども、私の考えでは、われわれの実存の意味はわれわれ自身によって作り出される(発明される)ものではなく、むしろ見つけられる(発見される)ものなのです。

心理力動〈サイコダイナミック〉的探求を価値の領域の中でおこなうことは適法(legitimate)ではありますが、問題はそれがつねに適切(appropriate)なものであるかどうかということにあります。とりわけ、極端な心理力動的な研究は、原則として、人間を内部から駆り立てる衝動的な力を暴露しうるにすぎないということを私たちは肝に銘じておかねばなりません。価値というものはしかし、人間を駆り立てるものではありません。価値は人間を押し動かす(push)ものではなく、人間を引き寄せさせる(pull)ものなのです。

ここに衝動と価値との違いがあります。余談ですが、アメリカのホテルでドアを開ける時にいつも私はこのことを思い出します。あるドアは引っ張らなければなりません、別のドアは押さなければなりません。さて、人間は価値によって引き寄せられると言いましたが、そのことによって暗黙のうちに言及されていることは、そこにはつねに自由が含まれているという事実であります。ある提案を受け入れるか拒否するか、そのどちらを選択するかはその人の自由です。同様に、ある意味可能性を実現するか、それともその可能性を逸するか、そのいずれを選択するかはその人の自由なのです。

ところで、ここで十分明確にしておかねばならないことがあります。われわれは人間が基本的本能によって決定されているなどと言いますが、それと同じように決定的な仕方、人間のうちに道徳的衝動とか、さらには宗教的衝動のようなものすら存在するなどといったことはありえないということです。人間は決して道徳的行動へと駆り立てられるのではありません。個々の場面において、人間は道徳的にふるまうことを決断するのです。人間は道徳的衝動を満足させるために、あるいは、良心に恥じないように決断するのではありません。そうではなく、人間は自分自身を委ねている〈コミット〉その当のもののために、彼が愛しているその人のために、あるいは彼が信じる神のために決断するのです。もし彼が実際に良心に恥じないために決断したのだとすれば、彼はパリサイ人〔偽善者〕になってしまうでしょうし、真の道徳的人格であることをやめることになってしまうでしょう。聖人たちでさえ、ただ神に仕えること以外には何も望まなかったのではないでしょう。そして彼らは、一度たりとも聖人になろうなどとは思わなかったのではないでしょう。もし彼らがそうでなかったとすれば、彼らは聖人よりもむしろただの完全主義者になっていたことでしょう。確かにドイツの諺にもあるように「良心は最良の枕」ではありますが、しかし、真の道徳性というものは、たんなる睡眠薬や鎮静剤より以上のものなのです。」(『意味による癒し』 pp.7-10)

この長い引用箇所が改訂版では丸ごと削除されている。ここには複数の論点が挙げられているので、以下に1つずつ見ていくこととする。

4.4.2 フロイトへの批判

フロイトは、人間の行動を、意識的な行動だけでなく、むしろ無意識の欲望が衝動として人を「押し動かす」(push)ものでもあると考えた。さらには、その考え方を拡張して、ほとんどあらゆる行動を、快楽欲求とその抑圧に基づく無意識の衝動に原因を帰するような人間観にまで至った。

フランクはこれに対して、人間が行動の原理とする「意味」とは、無理やり人を押し動かすようなものではなく、人をそこに引き寄せる(pull)もの、その「意味」を観取した人が引き寄せられるようなものであり、その「意味」に近づくか遠ざかるかの自由さえも人間はつねに持っている、と考える。

いわば、無意識の抑圧といった心理力動（サイコダイナミック）的な観点で人間を一種の自動機械と見るのがフロイトの立場であり、他方フランクはどこまでも人間の自由意志を信じる立場である。

この削除された箇所と同じ「ロゴセラピーの基本概念」の「意味への意志」の冒頭では、次のように述べられている。

「人間が意味を求めることは人間の生命の内にある根源的な力であって、決して本能的衝動の「二次的合理化」などではありません。この意味は各人にとっての唯一かつ独自のものであり、まさにその人によって充たされねばならず、またその人だけが満たすことのできるものなのです。ただその場合にのみ、意味は、その人自身の意味への意志を満足させるような意義をもちうるのです。意味や価値は「防衛機制や反動形成、あるいは昇華にすぎない」と主張する人たちがいます。けれども、私自身について言えば、私はただ自分の「防衛機制」のために生きるのは御免こうむりたいし、また私はただ自分の「反動形成」のために死ぬつもりもありません。反対に、人間は、自分の理想や価値のために生きることができるのであり、またそのために死ぬことすらもできるのです！」（『意味による癒し』pp.5-6）

「意味の探求は人生における主要な一次的モチベーションであり、本能的衝動の「二次的な合理化」などではありません。この「意味」は、ある一人の人間によってのみ実現されることができ、またその人に実現されなければならないという点で、一回かぎりであり、独自のものであると言えます。その場合にかぎって、この「意味」は意義を持ち、その個人の意味への**意志**が充足されます。意味と価値は、「防衛機制、反動形成、昇華」以外の何ものでもないと主張している人々がいます。しかしわたしに関して言えば、わたしは自分の「防衛機制」だけのために生きるつもりはありませんし、まして自分の「反動形成」だけのために死ぬつもりもありません。人間は、自分の理想と価値のために生き、そればかりでなく、そのために死ぬこともできるのです！」（『ロゴセラピーのエッセンス』p.17）

この箇所は明らかに「本能的衝動の二次的合理化」で人間の行動を説明しようとするフロイトへの批判である。人間の行動を決めるのは「衝動」ではなく「意志」なのだ、という点を強調するために、「意志」（*will*）という語がイタリック体になっている。

余談として、「アメリカのホテルでドアを開ける時」のことも書かれている。欧州のドアはたいい押し構造になっているが、米国では引くドアもあるということに対応づけているわけで、フランクのように欧州で暮らし一時的に米国に訪問した人には理解できるかもしれないが、両方を知っている者でなければ、体感としてあまり理解できない譬えかもしれない。

4.4.3 ユングへの批判

上述したように、フランクフルは人間を「意味への意志」によって行動する存在と考える。そこから、ユングの「集合的無意識」論や「元型」論に対して批判的な見解が示される。すなわち、ユングのいう集合無意識もまた、「意味への意志」とは別の原理で人間の行動を規定する決定論的な力として作用しているようにも読めてしまう。また、元型論は人間の無意識の作用を疑似人格化したものと考えられるが、フランクフルが重視する個人の「人格」をそのような人類共通のイメージに回収してしまうことは、代理不可能であるはずの固有の人格を、他の者と同一の説明で事足りるものとしてしまい、貶めるものだと考えたのだろう。

ともあれ、米国向けのロゴセラピー解説において、ユングへの批判的言及は削除されることとなった。その理由は定かではないが、何度か米国を訪問するうちに、当時の米国の心理学界ではあまり盛んではなかったユング心理学をあえて取り上げる必要性を感じなくなったのかもしれない。

4.4.4 サルトルへの批判

フランクフルによるサルトル批判は、ハイデガーのそれと同じく、きわめて本質的なものである。

サルトルの思想を平たく言えば、意味とは人間が勝手に考え出すものであって、だから勝手に生きることが一番いいのだ、という思想である。

これに対しフランクフルは、意味とは人間が勝手に考え出すものではなく、世界の中に埋め込まれている意味を人は「発見」するのだと考えた。方法論としては、「存在の呼び声」(ハイデガー)、あるいは、「人生からの問いかけ」(フランクフル)に具体的行為で応えるなかで、「存在の意味」ないし「生きる意味」が見出されるという考えである。

このように、サルトル批判の論点は「人間にとっての意味とは何か」という点にかかわる本質的な議論ではあるが、米国では実存思想が欧州ほど流行しなかったため、サルトル批判の必要性は、フロイトの精神分析への批判に比して低かったとも言えよう。

4.4.5 「良心」概念の更新

削除された箇所では「良心」という語が現れるのは、「人間は道徳的衝動を満足させるために、あるいは、良心に恥じないように決断するではありません」という文と、続く「もし彼が実際に良心に恥じないために決断したのだとすれば、彼はパリサイ人〔偽善者〕になってしまうでしょうし、真の道徳的人格であることをやめることになってしまうでしょう」という文である。

ここで言われる「良心」とは、人間の自由意志を拘束するような否定的ニュアンスを含んだ「道徳的観念」のようなもので、フロイトの言う「超自我」に相当するものである。

他方、本論文の「2.3 自己実現から意味実現へ」では、「人は、状況に対して常に態度を取る自由がある。状況の意味とは、精神次元に属する意味器官である「良心」(Gewissen)

が把握するものであるとされる」と述べた。 فرانクルは確かに、このように「良心」という語を肯定的にも用いている。

両者は明らかに異なる意味での「良心」である。おそらく、「良心＝道徳的観念＝超自我＝衝動の抑圧装置」という観念よりも、「良心＝状況の意味を観取する人間固有の精神次元の能力」という議論のほうが、西洋思想の伝統に適う考えでもあり、米国でも理解されやすいと考えて、旧版（1962年）から改訂版（1992年）までの間に、「良心」概念の方針転換があったものと推察される。

4.4.6 削除の意図

3つの段落について、フロイトへの批判はすでに同じ節の冒頭でも述べられていること、ユングへの批判とサルトルへの批判は米国では必要性が薄いと見られること、「良心」概念については肯定的概念としてとらえ直したこと等から、該当箇所的大幅な削除に至ったと考えられる。

5. 総括と展望

ロゴセラピーは、哲学的思考を導入した心理療法でもあり、フランクルの著書はドイツ哲学の用語が多用される傾向にあるので、専門外の読者には理解困難な箇所も多い。それについては、既出の2つの拙論文⁵⁾で、ある程度の解説を行っている。

今回取り上げた「ロゴセラピーの基本概念」は、フランクル自身が米国の読者向けにロゴセラピーを英語で簡潔に解説した論考であるが、それでも旧版では、欧州的思考や哲学に関する議論が散見され、米国におけるロゴセラピーの理解と普及にとってはプラスにならなかった可能性があり、それが改訂の理由ともなったと考えられる。

フランクル自身の手による改訂は1992年までであるが、「生きる意味」の発見・実現を支援するロゴセラピーの持つ力がより理解されていくには、本来の哲学的思考を生かした心理療法としてのアイディアを残しつつも、現代的アレンジが求められるかもしれない。他方、多様な展開に伴って、本来のロゴセラピーからの逸脱という危険も指摘されるところである。したがって、フランクルのロゴセラピーに込められた思想を原文に沿って確認する作業が必要であり、本論文はその端緒としての意義を持つものとする。

参考文献

⁵⁾ 竹之内禎「フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響（1）—カントを中心に—」『比較思想・文化研究』Vol. 13, 2021年9月, pp. 1-12 及び、竹之内禎「フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響（2）—ハイデガーを中心に—」『比較思想・文化研究』Vol. 14, 2022年3月, pp. 1-13

- ヴィクトール・E・フランクル著, 池田香代子訳『夜と霧 新版』みすず書房, 2002 =
Viktor E. Frankl, ... *trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das
Konzentrationslager*, 8. Auflage, Kösel, 2002 = Viktor E. Frankl, *Man's search for
meaning*, Rider, 2008
- 勝田茅生著『フランクルの生涯とロゴセラピー』システムパブリカ, 2008
勝田茅生著『精神の反抗力と運命／喪のロゴセラピー』システムパブリカ, 2008
- Søren Kierkegaard, "Diapsalmata," in pt. 1 of *Either/Or*, trans. and eds. Howard V. Hong
and Edna H. Hong (Princeton: Princeton University Press, 1987), 23.
- Elisabeth Lukas, *Lehrbuch der Logotherapie: Menschenbild und Methoden, 4.,
aktualisierte und durchgesehene Auflage*, Profil, 2014
- 竹之内禎「フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響(1) —カントを中心に—」
『比較思想・文化研究』Vol. 13, 2021年9月, pp. 1-12 及び、
竹之内禎「フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響(2) —ハイデガーを中心に—」
『比較思想・文化研究』Vol. 14, 2022年3月, pp. 1-13

The Evolution in "Basic Concepts of Logotherapy" by V. E. Frankl

—In response to the expansion of the readership from Europe to the United States—

Tadashi TAKENOUCHI

Abstract

This paper examines the evolution of descriptions in Viktor E. Frankl's "Basic Concepts of Logotherapy". Firstly, the outline of Frankl's logotherapy is described. Secondly, the establishment and revision of the commentary "Basic Concepts of Logotherapy" are shown. Thirdly, corrections and additions of the commentary are considered. Finally, the intent of Frankl's revision is considered comprehensively.

keyword

Frankl / logotherapy / body / mind / spirit